俳風

柳多留

二十七編

へ9
1147
32

へ 9
1147
巻 32

川柳の名ハきそ子の
名つくしのこともかの
ようにせまきをもげて
もおそろしき業ふかの底きをや我等
大松か柳の一葉
海国へ氏乃の大
柳が一派の功さ
二千三前を美
ト

崖裏言

川柳風景句合　補助　新音連

接斎評

お扇子も危ふ五日の風おこし　礫川
おたやさま〳〵風呂へいそがしや　玉章
あら恐ろ磯辺をぬいく車ゐ　春弘
出陣の勅免かなく雲のうへ　雨夕
繁ハ千とせをつらしめ仕給也　玉幸
（ヤナキ卅三）　志水

詫ハ地となり千丈大キな　湯となり
夫婦別あるハ機つと梅　のうへ
重代の図づりのよハねうねり石　市風
三日の祝月ともろともよハ退あ　雨夕
ちつほけなく大キな山をよく　柵雨
重の牡丹を一トえい枝ふをし　白糸
玉座へ洋酒法ゐつゝされれ　紀考
祝のゑ村へ出ほうびよ祝の　加玉幸
岡牧ハ村彫里牧ハち御なり　春約

地名乞二字會よおく任なられる
出大諏六尺田舍を語りし
京の傘をかりの旅人を指す
八百よ舸也百よハつるきなり
ゑこうけ霞よそうす詰坊の橋
ふてへやつ河内本綿を鉄よ染メ
ごうひをかつく一戒をやぶらなり
衣食住そろひ代参二歩なり
詫出いなんく仲く吉をおさ
ヤナキ卅三 二

玉章
矢正
古号
孤雲
里家
カテウ
春珀
柳雨
王孝

一ま筆よい水うへ
花へるかくこ書の菜かつことし
常覚てる有そうな亦象形山
十三口梅へらぐひす箏を
出蔵水料の理てるよへ
首洗ひ井戸よハ吉ゑほく
白沼いこ峯山をよけくうち
ほーの歩斗りつい
云よく涙毎日よ月のおさ

玉章
東号
集号
玉孝
九死
白象
市東
胡祖
黒衣

猶ゝシ　あけくれ兄弟ハなまり
まとけく　天人おこき　様へ　てき
あゝあげよ　くくくく　春駒
ひつさらう　里家
三合目茶のもの　たゝ
つれくよ　婚の入る　柵雨
姑の角にぎ　乗ゝ
桜のふとけ　無
柳うゝ　人二歩ろひ
柳うゝ　妻よのびあり　柵雨

我郎の　花な頃　くくこまり　振袖
咲計を　仰向　ト名
弁ゝ恵おふん　鬼やも　柵雨
かゝなりを　迄入　いなづまなり　振袖
油ゝ　嵐の　菜　来る
恵比須ゝ　夫の　ゝ　長蝶
嫁ゝ　里ゝ　絵をつい　来ん　玉章
笑なるゝ　衆人　ゝ　〃
すりくと　秀　ハ　〃

迷ひ子ハ一毎おしく囲う紙れ　葉衣
百毎あるところみするところぬやつ　蛇内
十万八千把線香をたてるなり　朝祝
投ぐの首ゥねけらヒ皇谷なり　松葉
ごみをそくゆう田楽みそを舟ヶ　春駒
もちまきゥ着るとき義ハ政権なり　兎乙
氣のどくさともり牡丹をやたく雲　碌川
化粧水ろる桜花たびへ入れ　井子
祖母〳〵そく衣盛ハ答ゥ着ゥを　麦雲

ヤナキ批三　四

油の梅田今もよめと下女お以
土間の脊をうける仕事の傍而
あゥきれの田へかゥやくの毎ゥ
松葉〳〵下女ハこゝもいなり山
投堅よなつくてる物ハ口を収イ
多切よ付く掛把を焼衣ハ毎〆
一万三把大　高の桜こもり
把弁のまづれゆう数ハ花
玉の門あるのよ氣へおつゝし

碌川
春駒
松春
朝祝
兎乙
馬道
カヲウ
蛇内
柳雨

海くもつくりの立を市秋上　矢公
給都の為よ三韓市征伐　梅水
晴をのち搖入る帆至秋　春湖
市相手の者へ海あほつこ入れ　古号
三枝はこうへよ扨の子孝好さ　暁号
楠くさ古戸山の大井川　亀号
いぢくさきのすこきねこおしへ　玉亭
市よおよなつそも消ねの浜　乗象

ヤナキ九三　五

いくて亀古田六宮古ニツえへ　東山
ちつほけなにくく大きな山をよそ　柳雨
吉原へ古をしイてるかしなり　蒲舟
八郎ヶ海トちくく立の仮　東子
森舞へもの姿川を返江する　玉亭
せめくもの孝と勅の矣をすへ　ヨエセ
営ハむらしのまの感恵ち　暁号
帰治しく投も百風ち再よ付　柳子
随神の一人りとしもの郭古へ　古号

ハのあるうちハ故をうちそこし
て命をおつく杉焼
北九の苦返孔子
つよく風鈴なの雪ふ家根へ高
まるハあんだんへいとそこまこう
おてへやつ油団本綿をハ鉄く深メ
毛布のくせよひやあ
迷ひ子ハ一面あ
山伏を指杖へ
さにとう面

市東　拝山
里家　一徳
枕冊　押雨
休子　磯川
更衣　カニクウ
カニクウ　暁雲
集雲　玉章
葉乙　長棟
有幸　雨夕

ヤナキ 北三 六

ハのあるうちハ故をうちそこし
て命をおつく杉焼よろこんで
北九の苦返孔子いさりなり
つよく風鈴なの雪ふ家根へ高
まるハあんだんへいとそこまこう
おてへやつ油団本綿をハ鉄く深メ
毛布のくせよひやあ
迷ひ子ハ一面あ
山伏を指杖へ
さにとう面

市東
里家
枕冊
休子
更衣
カニクウ
集雲
葉乙
有幸

拝山
一徳
押雨
磯川
カニクウ
暁雲
玉章
長棟
雨夕

ヤナキ 北三 六

汲給ふお来りを見ハ加茂在候イ
由兼お聞ケ御ル地蔵教
仲さうし覚くるくけつきつき
玉と璽奥さみさく
拾条金松川著のお拵
平家のおんりやう湯おくも赤く
敷後だちのあたるを探りふなり
ぬうらへ奥紙う切れくかと書
るのるハ修やく利をムうひ
ヤキ九二

押当
〃
東当
納花
左当
破元
卜丸
連当
押当
七

下女二名の膳よあつ
はしくの焼なうく該の平
家ものしみ刺去ヲをのそく
肯洗井戸よハ吉ら汲く居る
て俵ちそふこふ汲ら笑よ来る
こういをうく一戒をやふるかり
大たけさつさ女房よ五番ー
汁椀へ赤椀うを盛るおハいやつ
志さうく娘笑と演馬老笑イ

重当
孤去
玉家
白元
孤去
春筋
桝水
桝水
斑水

このサマのふくろう等をすかしこゝえ
吸をのく北中ヶ原柚の咲く頃
これら用いくさだと大一家
赤かるた袋の筆始ハかとり
川岸へなふ毎のそづたちをつれ
桐よ風風通室よ按さつなり
新茶就くんをころ〳〵酒をさゝ
五粉楊に初のすり兵さる業指
訳世筆筆此ますする事業ここの
ヤナキ卅二八

雨又
其の五
春駒
玉章
一二
川章
ト九
必美
春海

当へ古中のふへる谷の山
春たりもたる我ハ二十と矣一
冬牡丹趣町ふく根もけなり
鈴魚ハペんくゆくく春をかさ
浜十訂を出迄赤よ焼直一
名よりかよ知る人も多一海る
母通くあなられ文通く解かれる
地名を一字略よかく鶯ゐれる
山原室枝枝へおしたにとる雨

有春
岩蜂
柳子
五章
斗九
岩蜂
里家
土章
有章

廿八—第九
九—十三ノ
一枚ノ内

雨ノ
共ノ立
春頃
玉章
一二
川章
ト九
必要
ヤナキ卅二
八

有章
岩躑
柳子
五章
斗九
岩躑
里窓
土手
有章

当へ
春ノ
冬ノ
訣ノ
母ノ
地名
山吹
ノふへる
ノ山
ノ行
ノ人
ノ声
ノ牡丹
ノ町ノ
ノ根
ノ花
ノ焼
ノ人
ノ声
ノ通
ノ解
ノ通
ノ解
ノ
ノ
ノ

函さそふ所にく袴ハ主ゝ別れ　和子
新造いそ鴻よ酔く梅ゟ色　亀治
袖涙メハちこおつぺいとおなや子　栄太
おめ〻ゟを二人り笑ふまく〻年　里栄
同一まを（アメ女名）毎ト（ゟ）毎ゟたり　〃
それおる母ゟゟ小豆飯　松団
河东ぶ一いづれ新造笑の新イ　斗九
金箱の付くハおゟ紅毋の暴れ有　弁子
蛇の道を廿の紅ゟハ糸セ汁　一徳

汁と塩だふふもき道具吸　布袋
汁要を吾くくうハむこ松ひ能　金楼
すげろへハ石ちい煙りのさび行形　カテウ
瓜ま打を焼れ好ふ名子消一　振袖
湯豆腐ハそしもくいこもく咽へ元　孤雲
能舞ゟちつ投け売袋へ入れ　弁子
始吹ま有ゟせくんたいちの貝　ま天
居ま有大原の有ゟ小石川　弁子
三人の宿中へ梳のやにがづき　東助

道具の後具をそれぞれ天下一
ふうまをつれて湯や横丁をまわり
茶谷さ化く粒ハこまるなり
石えのまよ一疋も祢づこなし
ろ麻い麻利にハ月ふ象へぬけ
おらーさハ解のお日の小粉石
桑の毛へろ男うろくかへまき
重伝法取るハ相撲ゥ大きい
いーかニーホロよ海七ハ茶ゥ付ウす

熊谷
田毛
湊ろ
久毛
一徒
暁ろ
スメ
集ろ
菊ろ

亲のぞくさぞもり社毋をやた〻屋
小間ゞ例く楼付いぶさせる
投ふうの首がぬけること倉谷ち
凍ざまこまりくとこぞハ等し
ろの皆様よ歩ひくろゞのもり
地房の汁ず亭を併まつさ
五六寸入れくすふきしまちなり

磔川
ヨユセ
松茶
桐子
倉猪
速ろ
破先

東鳥評

吉曲くに沈みも晴れ雲もはれ　桑名
鐘の紛れり羅うきへぬなり　磔川
布千代おもを万代師跡上　竹麦
重つくみなると須田八川まへ　古号
九代目ハノりら沙イくおつきれ　千重
筆申へ和澤名すきれ乳母子もり　矢正
ぬりも氣も雅よ長はうま　春玲
東海の波おきへく踊ハきへ　磔川

ヤナキ卅三十也

羊先門すにし初ねつく万よし　カテウ
ひさつよもゆけめのをうおよ病　英祐
ふち都一てもおを書を乳　能号
やうな姓葉姓の此遠よ合　桑名
梅り個吹と来のをふう春を筆イ　市風
芳香等を云あ一まり　渓信
こつそりとゆあ格のむ一亜一　矢正
あそり川降祇遠のまの川遠り　暁号
むぶおく遠俗さをる石地義　朱子

俳限の会アつらも江イ　亜呈　春駒
石拉へ田の雪を不〳〵おー　市風
元旦雪工ら百も壹枝三歩ん　弥川
風詮の不よまそ久亜をのられ　暁彩
雅さいもひんをくな昭也ー　垂雪
開ーい附ハごまめもそ〳〵夫り　川雪
まんちうをかれ入よー〳〵そを也　寸天
ら代よも正札附の呉服衣　玉章
様若へ七ッ月をつむ振うき　柳彩

主居〳〵あむうへーの候まふへ　市風
いうの投まる也為と沸ちを考え　柳雪
五母ー首四へ為ふる吉日よ　藻紀
俗云の切拉へおる板北庁　右雪
天ちりんへ合せ〳〵笑ハはちな　井子
珀下秋くかるそこらへこうふへ　里霞
珀さーをえよかっりとおつふ尺　天正
投なき等を母ハ矣をふろひ　スメ
云よふをおつく柏杼の柄ら拉る　一徹

冷飯を二合半位水へ入れ
南風よく吹のハ粉を振
うさんさい旬を
志ゐの柿よろこび鳥ハ遠ク
湖ハ小川へせんさ
米元八百やへ寄
せんさ兼松図
なんへ鞠こを
よハ将棊を須へ入れやすり

辻丸
天正
カラハ
玉章
桐子
九水
暁窓
朴子
春雨

やす帖三十六

坊主お石の地蔵へ
玉乗り十五の
ハ子ふ出使の
未ゐの時よくねれ
ゐ大のやうなお髪下ゟハ切り
たんぢへ取
神丁やしくえ
佐保姫の瓜を
沢庵のおしう

左玉
末雁
助石
門柳
渓流
小石
春雪
左ゐ
板油

帰雁よ南日ごとせる男の子　二三
お宗をつれ向り　林糸　遠雪

川柳押評

天狗おぜんぜの義〳〵を招メ　雪章
天地人を奏ぶりのおまつ　孤雲
祢ぎもあイ男泊ハ厄白し　碌川
日本の誉れ稲荷宝有虫　雪章
お苗字も許も先祖の功竜木　碌川
八を垣よ結び垣さる山の猿　スミメ

日ぐれ初メ夜明ハ自の法師山
通ー矢のまゝ　スミメ
寿沙のうつゝ田ぐろ　玉章
お願ふ田ぐろ　升子
弓八湖大方てハ沢り干ゝ仕舞　諦号
農夫自慢や仮名を誇る和尚のまゝ　九水
かすゝ山ゝメゝ　鳥の川　万仁
ふきけんゝ平大名をおもゝ迄　柳雨
る宝ぶね祢集宝ゝ田を植る　孤雲

ふさとふもめうど
しさまみらつせす猛面の実を誂し　春豹
宝政よ后上ヶ祖の蝶をつけ　九子内
琉球のはよそびころ重ニつと　天正
白ゑをこやーよ筆を植ゑひ　志水
女房をさすへ手を京へ配飾ん　英信
ま〻鏡ハ茶まうう子ハ月と偏き　季孝
廿五ノ月ろう一人りし文字　梅水
就ハまろ姫の並へすき通り　磔川
　　斗光

千羅をまくみを人　母よくみ　調祖
文道よ武道を加茂の活業程　三枝
風合の下よ一文亜をのつろう業ふ　暁雪
逢ハ四つろう業ふ面つくれず　九子内
筏栄汗道半をかつくん　東子
松ハぬろさん山吹ハつふぬびし　鶴雪
今梵さ五条六位の新よまる　一徳
人まもでありま猿河　遠江
かつまりと秋夫の面る古戦場　明夕

旅陽のふいごくとつこおまるく　カ子白

抗声評

はんまうさ義へとも下りる席八連
虎の江戸の国を　和口　天正
こん談の主まる程よ記ごくいり　琳此　延宝
三画を割く一画ハよ入り　青
店名のハ部よその右う別れこ　矣正
書かともめくまりやせる月のあ　丙夕
もといくさ記ふの物かより

今様さ記第六位の部へあるも　井子
宿営宴二を召もる亜秋三止まり　一雄
仕付草ハ又ちちるへ立かり　碟川
実おくく井第四句へ点をつく　暁号
赤坂の点ハセ里うかきりなり　天正
棒組もの一ま武勇の席り婚礼　松山
後拍ハ九十九郭よつるうはり　カ子白
装服店おそうく誉るて　女　集号
　　　　　　　　　　　　　排号

元吉原くゝ此春を愛おもしろさ　如花
振そまるそハ面白イ別れ哉　朱雪
髭はどおをつけるくるゝ一ツ玉　柔花
年のある松ハ南と海も松斗り　九朗
偕老のかもめの巡ル三谷毎　大京
火のあイ国に七里と九十九里　桐雪
大の字をてうど富む奥の院　仝
言へんよも神ぬくたつとき　矢正
太皆おつくたう元のおあなり　蒼葱

ヤナキ此三廿二

鴛坂ハ物えの松の下くゞ笑き　等雪
新よ火のもる筑広の出家れ　桐雪
牛酔のお来ぬ高うる出家程　錦雪
ちハ海をかくハ沈うてくゞ仕舞　仝
月よついさ端ハ松葉のちつさ　朱二
日なの暮れ智方出家有る宝　玉雪
兄弟くゞ出のをゆふいまつなり　山麦
信正の切様へ有る恵のき葦　古雪
富士山のあさまを押ハ当斗り　碌川

八文位ハ三文ほど仍つく書を入れ
筆中へ和漢名ろい乳母子やり
行康山五百矢てくしくところ
紀二本人味出信よ咲るかる
だめをさ次谷の柄を拇球与
る仲の此イハ好やくろく紹れ
紀寛ハ川越日連波のうく
若葱の打ハそのを枚へうち
婦のよをかうく味あをかき

やナキ廿三 廿三

亀多
矢正
孤雲
東水
柳雨
白兎
連当
牛子
柳当

ハ川の足へ野田のこれや来ん
門辺のをそくあたるそほり洲
着屋きりくしとかしこまり
下るれを志さると漬けひみやつ
子天物の香母をろ氏端いろけ
江戸何く更切つく杉松点
油ハを解沙さきのやよ折り
松おのかそる柏子もかつとせの
杉焼のうふ店く下女計住申

岩当
連当
二三
雨夕
岩石
玉泉
竹麦
錦当
孤雲

出にのかんでんたれもなひきひ
井さ㐂くく向あのかこいこすると
その角を買人よこえる同流変
重設ら許くく松ハけひるなり
売の名を八十八と付姓しうり
売うう抜毛はごなうをつき
振れも知くく女房ぎり許る
市産不をみんなえわけであん
義名のやうなたがやの乃呉名

ヤキ枕三北四

ううくを佐名のつけをんね乳母
不自由よきのをあこそのもの石イ
油やしの字こまけをたうすなり
放れる西波えるふくへやつ
唯あ牧よりこねね牧や返ふち教し
かくけの保ぜまなる家をさ
明条をまたもうあう林京
若集八脹み動ううし陽よし

集当
牀当
業
羽メ
礫川
論当
蓮当
千重

廿五欠

廿六ー廿九欠

登川	
振油	
桐九	
九礼	
千織	
茶云	
柳子	
南風	
東子	

出にのかんだんたれもなひきひ
井戸端くの向のかこいこすれる
その角を美人よえもる用流要
望設ら舟くく松ハけしるなり
夫の名を八十八と付姫ーうり
売ら抜毛はごなうそをつき
振れも知くく女房り舟る
市をみんなえわけであん
裏名のやうなたがやの夏名

ありろくを佐名のつくそんね乳母
不自由よその子をあそのもの 云イ
油やしの子さまけをたらすなり
放れる毎波るふくへやつ
吟あ牧よりそねや返ちねー
かくけの際ぜまなる 舘をさ
時案をうえもうあう 林京
荷案ハ陰み動ふく陽よし

集多
州多
学美
羽乂
磯川
弥考
遠考
千重

斗九評

柴の戸へうつる秋乃月　雨夕
不二へのろつく雲ちごやごこたろう　鶏弓
討死のかくごハ三田紅く初れ　矢正
上ヶ足を三階茶くえる茶すり　吐声
鬼ハ外福ハ内こハ今りてなり　スメ
手前者奴より能を思しり　麦鶏
狼もそく二月もものをすしや笑　什子
氣ハ晴ね〳〵狼のそる四の月　紀弓

ヤキ廿三年六

二諱の王ハ主えよく出華　什麦
孝の道楊をかけるも安大る　柳雨
清盤ふ末ぬよれをあるなり　志れ
竿つなきをはハなれねやのまき　三村
死きハよりくほゝい三つなり　金勝
菜つまよえせる大根の子あんざい　暁弓
小人盗いつも無頂うたりあやり　清風
事そくく討来りする仲間　志水
おつと兎を和尚地獄へさけるなり　三七也

狂四ハ一不二ノ三ノ三　茄子

江戸おのおのおなます妻くやつ　栃・
お足を出すハ芥の葉の浴しゝ　振袖
吉野山こんな桜子丈ケ也　三枚
歌俊お世ハことし　トメテ
初夢ハイこんや石ノ内へ入れ　スヽメ
裏も蛇も酒く　耕耘
つゞく合坊を手と　里雀
田舎ニ赤イ鼻結を尾へすげ　金勝
　香員

討死の笑絵ハ去ル田舎ゝ和れ　矢正
おんのうほたい蜘の糸蓮の糸　柳為
紀伊キ男ハ姉湯をする西ノ方ニ　白兎
うき奴ゝ箱火を焚　佃ニま　錦ゑ
君命まもるハし加ゝ和平をゝ　市風
人の子をゝ未来ゝ迄世界　古ゑ
いちじしさニ下りおゝ子をな兎　能ゑ
小夜の里の光ハ三歩ゝり　志ゞ
笑のなゝ絵をゝ　諦ゑ

珈也八一不二二寄三 茄子

江戸おのおのおなます妻ゝやつ　柵寄
お足を生すハ芹の素の浴ゝ　振袖
寺社山ゝんな松子丈坊をなり　三枝
歌俊お世ハことゝはぎをねき　トメテ
お女郎ハゝんや色唯ケ門へ入れ　スメ
裏も蛇も酒ゝそゝそ屁かゝら　朋杉
つゞく合坊をヨイよ耳と尊　里産
田舎ゝ唐ゝ赤イ鼻結を屁へすげ　金勝
　　香員

討死のゝ笑決ハ古田紙ゝ和れ　矢正
おんのゝ母たい蜘の糸蓮の糸　柳為
印証キ男ハ姉弟をする両形ゝ　白兎
うき母ゝ解犬を焚　佃一ま　錦為
君命まそゝしかゝ平をお一　布風
人のて子をを未来ゝ誓ふ沼世界　古為
いちゞしさ二下りおゝ子をな発　能為
小夜の星のゝりハ二歩ちり　志水
笑のゝ身ゝゝの往をゝり　諦為

婦のうち狂たちの出雑なり
次の年く書をたすけるを待ち
盤久と称う仕くに千羽鉾ひ
為目のつの笑くあてる袴掛
小ハる南ハ年をこーくわく
忠義よハ善年よりね　作ちん
合梅ハ嵐をすの　ちくころ
添妓ハ知らき人等の春の毒さ
特年年もを屋よなるをむつをい

やまと花三　七

矢正　孤雲　泰雨
晴声　松山　和里　雲川
松山　玉亭　里家
市風
乎輔
千成
桐子

加る里さの　松よなり
毛のをへさ鹿を和尚ハ解よつき
こうふやハ下駄同仕ハまはしめたり
女讃酒狂悔ハこちみ風

狂声評

金銀のるハ白本の産へふセ
狂歌のるもくるハの道まく
狂代ふこやねな作あ有かつ
傘ふく俗のおふくハ道哉寺

古号
狂号
葉石
力言

婦のそうさもう狐たちの出雑な
次のやく書をたすける事を漫
盛久と謡うたく千羽舞ひ
為宣のつまくあてる稽痴
小八ちる雨八半をこーくわく
忠義よ八美女よなつね 作もん
金梅八嵐をすすのたくところ
添妓八ねんきんの素の毒さ
特牙もも屑よなるとむつとしい

加る足さの色味ゑく松よなり
毛のたくさん屍を和尚八解よつき
こうふやハ不動同位八志よしめたり
女讃作 勉強悟八ことなみ風

狐声評

金銀のるハ白木の産へふセ
狩狸のるもくるハの近まく
狩代ろこやねよ作ふ前かつ
傘ゑく俗のゑくハ道茂寺

矢正
晴声
松山
玉亭

古号
魁号
栗石
カ言

大名の子うれさ踊居袖う俯
千重の花容よあきらに半
蛾通しもとさおうもつらしい
天神へ梅あたごなれなり
盛久と誰う沿らく千羽鶴と
神主の下四の射つき
乗日光へ志うも名言い一人り者
六条仏七をかけても多仙なり
仔撃退八団扇の付く古大踊

志水
紫詩
孤雲
九郎
和里
矢正
柳雨
巴山
秋子

ヤナギ此三此二

極楽の弁くに話をも云ご先う
省ぶりもづなの男八まり
田子ま産礼をすこるひん学者
茶の者祖へも幕をろろく居
酒の将すくみ山沿う付ころ
産形を横ま女八猪をんぞう
作の川坊子後急うるくなり
此美地ま女ひしハ松をうり
つんぞう八雅者後うの月平り

古多
弾弓
鯉角
千重
紀角
川幸
能名
古名
柳子

梢こ田へ厂室お子る十三時　竹妻
二十四ノ孝り四十七　のた　里荘
関ちハくの者ろ名ろ亲ろつろす　白彩
わてきしたハーのうこをるくくかく　宏川
地元りからどやくこ来テ陽ろこはれ　为夕
ハ八ろかの名こ相根ろ心処ろへ　朴子
きのよ原さやつ老猿を前来く　力二乃
教人ろ母よおしくるの白こ　水石
通ちのる笑くあてる稽　梅　宏川

里ひくき地方の物メこ
然谷ハ今よ辺ろ追くよそころ
渡かまん探利く問へテなくべ
地方門あてくる笑ろかくこつき
小名やハ一日によのつろハれる
たとへ火のかのそこ白のうく
子を思ふ我るの老や〈竹まし
母祝ハ祝るの老や〈迷くひ来な
ハくれさ四五日及よまろなー

暁烏
春鈴
空秋
大京
鯉角
芝苑
宏川
碌川
吐声

忠の字を云く眼玉を彫よかけ
沖老や摘老を云くうなるん
物干く美色をなき声のさらし
い〻分限一ト間此の出用ニテ
色も鉋も洒く〻ろ〻屁かしら
ねいく〻禁一切くよね先つける
去年んく〻笠を彫くく美歩ん
券の名物をかけるも安大る
ぎく〻茶を安す〻よ盛るやよ

ヤ年此三此日

藻紐
矢正
古多
霞霧
里雀
碟川
至青
柳多
孤去

おつそ〻をねいく〻姉よ七ツ年ハセ
あ根の江イ女市八当ちりく〻
升の子く〻市八当ちよく〻市八当ちよく〻
祖言ハまけるぎてく〻ふちころ〻
う〻来りとりく〻易子まつたら
蜂一ツ良女下茶まく〻ろさき
虫さ江〻市ろ〻多のよい男なり
当頭のかさまりたろう秋をは麦
毛のそ〻さ屁を和当八海よつき

カニ乃
鯰角
石綿
霞霧
樂多
大京
斗九
井蛙
吐声

十八のたんざくのうつくしきを
遣すねけるさそくおもしろき評
　　龜多
三度て御製よ叶ふありがたき　　澤龍
あふ魚八百代よ叶ふ歌上古多　　古多
廿雅可へきのは大へのふ山なり　　角久
松作よ千里同風こゝろの月　　カテウ
盞の内魚八宝の井ふるき　　香圓
千代の仟違八年返ふりつき　　スヘメ
ヤナキ此三此九

千載へ日かけの榊一本入れ　　澤多
る毎ハ松る人ハ榊ふり　　柳角
吉のまの歌在所の美地なり　　カニウ
玉箒へ矢多射加へす一文ま　　い
ほくさ世貧のる毛ら来る　　矢正
二千歳えいく畔の苔つゝ　　玉孝
京深こ江戸深百へ身を讀　　澤多
貧学のあふりよ学ふ友こゝろ　　朱子
機ちる度よ妙夫ハ琴を弾　　古多

廿寅のさういせハ一ハ
ゆ苗ゟハ春ゟ
ゆるりびゝ赤子ゟ二ツ
宇治の茶ゟきせんの張ハきつゝ
新しい板ゟ古家の
串こいゟをかんやきと云
五風十雨ゟ年納云
坂本ゟ人ゟの人
新茶の工夫とえへねをきく

ヤナキ此三此六

カテウ
玉章
〃
集ゟ
香具
礫川〃
梯れ
集ゟ
笠ゟ山

苦ゟ吉おなつゝめのうふかく
御当城ゟ此日ハへんのえれゟしめ
者の池へ鞆の形りくむちをうち
てん生ゟうさ橋をゟむ人くてる人
白ゟの面ゟ梅名ハきついる
春となり初ゟハすゝれきたとおもひ
梢ゟかけ松ゟ鴉ハ等くてる
ぬれゟうあつくて灼金をさし
ゟりハおれゟをやいと年

集ゟ
トメテ
里花
矢正
古ゟ
香具
カテウ
柳ゟ
千成

かて飯のあぢをわすれる境 海
汁大あのうとこんいまはなしん
瓶ハ桜 南人ハやーきこん
梅の木ハ葉発 梅ハ 俤様なり
詩云の文字ハ梅の木へにーこ
辰巳の明ハ浅黒のあく落れ
看病をする女房よへんう出る
川柳評
長老の方雑神美こ小美ん

ト三
斗丸
源弓
左弓
鏡角
松ふ
竹麦
丙メ

新しいお相へ上るをゝれゐ
手ことこゝお辰弓へ年を一度ゐ
洗盤ゑそーー神代の始なり
こ下りあり雲井を相へあけ
桑畑のよへたつ比が帰仕ゝ
前髪ハ羽を彩ゝく傘をそり
風風ハ神のかゝべよやろこ
四隣月むま女、孫、再へ沙うさし
竿をかゝけゝきまゝかな玉ん

極ん
玉寺
碑ハ
黒家
孤去
左弓
玉寺
カテウ
丙メ

金の雪吾妻屋の井ざさき　香員
市村筒志ろくほめく五百挺　〃
多返し枝の咲のハ笑の江戸　綿多
繁昌のごとうし野日の活配へは　魚名
志ふちさと思ひ羽織まま事迄　香員
千三せをえつく紫の細こより　乃夕
志なの板まも吉ほこつもるやう　魚多
祇むらい子とえ加へる三度笠　玉亭
仁分を手島の川ほめく坊く　魚多

京をめと江戸をめ百く日を後
三階のも兒かまぐらの法大名　論多
すゝ笑兒のおやまえせゝやり　紙角
伯父の団ようなこゝさてゝしへ人をたく　大京
牡蛎よこゝすゝるこつかあ　筆書
大高のねや蛇三つをすゝろ　古多
耳の先入ねよゝゝ姓ゝし　力高
のゝ色やつとみりおすゝ貸　里家
二ッ三ッいびきをかくこ酒呑より　吐声
　　麻川

それともつきぬめしへ糸なり
辻書のかくそう何よかのゆうあ来
たくもいつくれす源亜八墨をすり
お指の筆をとりのうんせくのを
主のうをあ老のあけぬむいさ
東画へ一及ての上田　ーま
丁のとふ下メを岩濤の初うつ下
たのこあるの酒妻ハ松の下
あーこあらうきせく塔妻笠お来

やすき世三北九

亀多
雛箱
能多
市風
笠止
暁多
井子
里冢
寸尺

若七吉かなーつこ
大江小下をえりて下女多の首
えなれるのんく辻妻こうを敷
事こみ字をかてやきこーや後
とつさんハもう十海るう若多すり
あさおいひ地をかみようつらん
ろうそくのさいえはしハえりまん
主汲のうハちいさいう二女あり

楓声評

集多
スメ
カニ乃
碌川
トメテ
矢正
松の
至書

柳美のこゝろこそへぬひきへ　笠山
糸をしらくぬきはふえへぬはゝ不車　カニテウ
西籟のけん斗のこるはゝ第　孤去
省イてこゝ〳〵川霧ハ里へ雨る　浄宝
こゝろ〳〵くもるゝ雲ハ拍　松宇
雪の美〳〵月もつきそふ夜仕舞　魚号
四十七すてる命より手をとり　布風
すてきの就ゐ三百月の三毒奴　大京
え私ハいつもセ立石なら以　千重

ヤキ廿三字

白々と坂す人の手ハ手の柱　黒家
十七の海ハひろ〳〵名うのこり　至青
先つゝしいき橋の山く笑　笠山
不二を見ねやつゝ作し実語教　集号
光陰の矢えたくの柱ハなし　黒家
寸神座たてゝふの八市　有表
泥釜のふさ南小くたてさ合　有貴
まへ今きもにきもなくともひまや　紀号
かくを入れ手綱の廻る車の不休　柳雨
　　矢正

なくれし子のかくなる玉の傘
おさ〳〵をわすつまもつもりね　千宝
洞たふいたいく玉子あらゝれる　里雨
晴てまなかく日本中うひく　樹山
秋のメこれにきやうをせういなり　スヽメ
あーの湯こいへと知根の子宝ん　船弦
二階のも先かまくの話大名　里雀
いそがしさすりつけよ座敷人　鯉蘭
犬猫も玉のハよくひく　集当
ヤナキ廿三　里一

等こ吉おかげし　集当
湯お鍋のぞりあー湯のぶつ噂キ　古鳥
お江ハ東本うしこそ多本なり　集当
記念かり女房ハあーた様のシテ　玉雀
古懐集角をつくりをひつさ　大京
ら五郎ハかんさけ売りこ兵ひつき　春駒
ほうたちを梅ハ岩中へたそう　胡禎
たゝみこひつ付合く版をくひ　竹麦
名入を十九く桶へ入れへる　井蛙

立風十句こゝろねんハ中納云
にもよも古をも誠と女房之　桃水
小さ物のまさくに川井やうたれ方　矢正
こゝろてもそんねいとうねひかりん　栢油
名うしくさもさそよ梅すま　〃
夫トの毒たち女房の口をテミ　升子
つさあしハ来迄をもつくり　魚雪
さうろこくおのころ鴉のたね　竹素
於すしのる遠くそちをうき　百声
　　やよ世三年十二月　琴山

○俳諧風書品目錄　江都　山王之辺　花屋蔦次郎

俳風柳樽　拾遺二冊　川柳点句初代名

岡川傍柳　二冊　川柳点句初代名

同柳句拾遺　二編　同

同柳句拾遺　三編　同

俳諧風書品目錄　江都　山王之辺　花屋蔦次郎

岡川傍柳　二冊　川柳点句初代名

同柳句拾遺　二編　同

同柳句拾遺　三編　同